オーガスト
オフィシャルハンドブック
2012年秋号

OHB-120930

P R E F A C E ― ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。
何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

7月末のスーパープレリュード発売から始まり、8月中旬の夏コミ無料配布、8月下旬には店舗様での『真夏のオーガスト大感謝祭』と登録ユーザー様への暑中見舞い同梱、そして 8 月末のウェブダウンロード開始と、様々な形で『大図書館の羊飼い』の体験版を出して参りました。
その甲斐あって多くの方にプレイして頂いているようで、様々な形でご感想を拝見しています。
プレイして頂いた皆様、ありがとうございました。

もしまだ『大図書館の羊飼い』体験版を未プレイの方がいらっしゃいましたら、オーガストのオフィシャル HP からダウンロードサイトへ行けますので、プレイして頂ければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2012 年秋　オーガスト /ARIA 拝

CONTENTS

3 …… 『大図書館の羊飼い』Short Story **図書部への正しい依頼の仕方**

8 …… **オーガスト最新作『大図書館の羊飼い』情報**

10 …… スタッフ対談

11 …… あとがき

大図書館の羊飼い　ショートストーリー

図書部への正しい依頼の仕方

榊原　拓

カチカチッ
静かな部室に、桜庭のクリック音が響く。
桜庭「む……」
そしてやや険しい顔。
しばらくして、キーボードを叩く音が続く。
桜庭「ふう」
図書部宛のメールでも来ていたのだろうか。
まあ、誰への相談も無かったということは、特に大した用事ではなかったのだろう。
皆が桜庭の様子を伺っていたが、それぞれの作業に戻る。
カチカチッ
桜庭「むっ」
すぐに、桜庭がまた険しい顔になる。
白崎「どうしたの、玉藻ちゃん」
桜庭「いや、ただのメールだ。気にしなくていい」
白崎「それならいいけど」
再び、しばらく桜庭がキーボードを叩く音がして、止む。

カチカチッ
桜庭「……むー」
三度目だ。
さすがに図書部のメンバーも放っておけない。
筧「どうした、またメールか」
白崎「同じ人からなの？」
御園「ストーカーとか？」
鈴木「恨みを持つ者の犯行かもしれませんよ」
高峰「いやあ、人気者は辛いね」
みんな口には出さなかったものの、桜庭の動向は気になっていたようで、一斉に口を開く。
桜庭「ちょっと待ってくれ、一から説明するから」
白崎「お願い、玉藻ちゃん」
桜庭「ああ」

――それから桜庭が語った内容は、次のようなものだった。
コスプレビラ配りなどを通して図書部の知名度が上がるに従って、図書部への依頼メールも増えてきた。
しかしそれに比例して、受けにくい依頼も増えてきているのだという。
桜庭「今日は、図書部宛てにメールが届いたと思ったら、三通連続してそんなメールだったんだ。それでちょっと対策が必要かなと考えていた」
筧「そうかもな」
御園「図書部として受けるのにふさわしい依頼かどうかというのは、誰が決めてるんですか？」
御園が疑問を口にする。
興味が薄いのかと思っていたので少し意外だが、いい傾向だ。
桜庭「あまりにも図書部の趣旨とかけ離れたものは、私が断りの返事を出している。それ以外の、ボーダーライン上にあるものは一件一件白崎に相談する流れだ」

鈴木「はいはいはーい」
大きく手を上げる佳奈すけ。
鈴木「今桜庭さんが仰った『図書部の趣旨』というのは、一体どういうものですか？」
桜庭「趣旨自体は普段から白崎が言ってるようなことだな。断っている依頼は『授業の出席に代返してくれ』とか、『バカンスに行く間だけバイトのシフトに代わりに入ってくれ』とか、そんなものばかりだ。判断に迷うようなことはない」
溜息をつきながら答える。
高峰「でもさ、つぐみちゃんが言ってる理想なんて知らない生徒が学園のほとんどだぜ。そいつらはみんな、どういう依頼が断られているのかなんて知らんだろうよ」
正論だ。
そうなると……
筧「白崎の理想を元にした基準を作らないといけないだろうな」
桜庭「私もそう考えたところだ」
白崎「楽しい学園になる依頼ならお受けします、じゃダメかなあ？」
ちょっと残念そうだ。
筧「気持ちは分かるが、もう少し具体的にしないと意味が無いと思う」
鈴木「そうですね。私も弥生シスターズの妹として、お姉さまのお考えはしっかり把握しておきたいです」
御園「私も一応」
桜庭「……というわけだ。すまない白崎、筧の提案は無粋かも知れないが、我慢してくれ」
筧「同じことを考えてたっつってただろうが」
桜庭「そうだったか？」
高峰「まーいーじゃん。話し合ってみようぜ」
桜庭「高峰が話を進めようとするなんて、明日は槍が降るな」
高峰「俺、どういうキャラなんだよ……」

☆

それから数時間。
具体的な例を引き合いに出したりしつつ、全員が意見を出し合った。
桜庭「では、皆から挙げられた『こういう依頼は受けたくない』というものを列挙したところで、それをまとめてみよう」
白崎「お願いね、玉藻ちゃん」
桜庭「任せてくれ。まずは……誰かが得をするような依頼で、依頼者が得した分、他の誰かが損をするタイプの依頼だ」
筧「なるほど」
桜庭「グラウンドや体育館の部活での使用時間割り当てを増やしたいような依頼がこれにあたる」
鈴木「他の部活が、その分使えなくなっちゃいますもんね……」
桜庭「こういう依頼は最初から受けないことにしていいか、白崎？」
部長であり、理念を最初に掲げた白崎に確認を取る。
白崎「うん、言われてみればそうだよね」
桜庭「じゃあこれは決まり。次は、メアドなどの個人情報を教えてほしいというタイプの依頼だ」
高峰「第四保健室の美人過ぎる保健医さんのスリーサイズは俺も気になるけどなー」

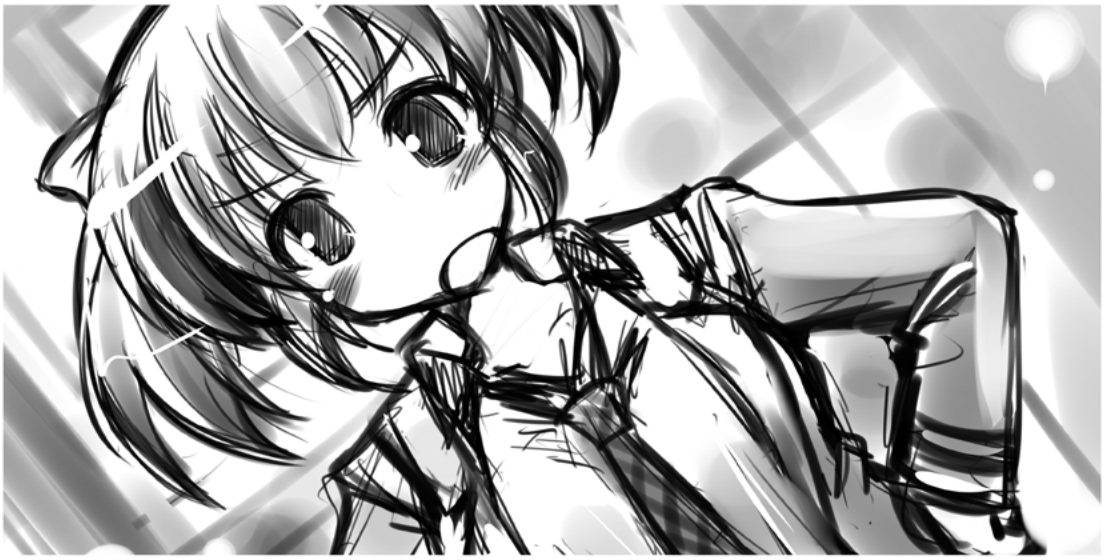
御園「最低です」
桜庭「スルーするぞ。で、次は依頼人個人の金銭的利益のための依頼だ。これは当然だな」
鈴木「場合によっては、奨学金の窓口なんかを紹介してもいいんじゃないでしょうか」
白崎「相手によって柔軟にできればいいな、と思うよ」
桜庭「わかった、そうしよう。……えー、次は公序良俗に反する依頼か」
筧「どこかの部や人の悪口を流すといった依頼は受けたくないな」
高峰「声優・芹沢水結のスクール水着写真を水泳の授業で撮ってきてくれ、なんて依頼もあったしなー」
御園「受けるべきじゃないと思います」
白崎「私もそう思います」
桜庭「……うん、大体こんな感じでまとまったかな。あとはちゃんと文章にして、依頼のガイドラインとして図書部のページに上げるだけだ」
鈴木「さすが桜庭さん、わかりやすくなりましたね」
御園「これで安心です」
口々に賛意が上がる。
……しかし、一人白崎だけは微妙に浮かない顔をしていた。
筧「どうした白崎。ちゃんと言えてないことがあるなら、今言っておいた方がいいぞ」
白崎「そ、そうだよね」
筧「ああ。このメンバー相手に遠慮してどうする」
白崎「うん。……あのねみんな」
全員が、白崎に注目する。

白崎「本当に本っ当に困ってる人がいたら、その人にとって学園が楽しくなるために、ガイドラインに反してでもちょっとはお手伝いしてもいいんじゃないかなって思うんだ」
桜庭「気持ちは分かるが、それを言い始めたらキリが無くなってしまうぞ」
白崎「うん。玉藻ちゃんの考えも分かってるつもり。でもね、この前の学食のフェアでビラ配りしたのだって、あれで他の学食の売上が減っちゃったかもしれないでしょ？」
御園「確かに……そうですね」
鈴木「言われるまで気がつきませんでした」
一年生コンビもうなずく。
白崎「だから、何でもかんでも、杓子定規に考える必要は無いんじゃないかって思うんだけど……どう、かな？」
最後で急に声がしぼむ。
だが、皆も白崎の意見に賛成のようだった。
もちろん、俺もだ。
鈴木「白崎さん、感動しました！　さすが世界遺産です！」
御園「私も白崎先輩の意見に賛成です」
高峰「俺もだ。部は楽になるかもしれないが、自分は門前払いされたと思っちゃうような奴の中に、本当に困ってる人がいたりするもんだからな」
白崎「でもでも、玉藻ちゃんがこれまでやってきてくれたこととか、今日まとめてくれたことはとてもいいと思うんだ」
桜庭「フォローしてもらってすまないな。私も白崎が良いと思うようにやっていきたい。至らぬ部分があったらどんどん指摘してくれ」

白崎「ううん、フォローとかじゃなくって、玉藻ちゃんがしっかり考えてくれなかったら、依頼が多すぎて私達だけじゃ対応できなくなっちゃうもんね」
白崎も、桜庭の仕事をしっかり見ている。
桜庭「いや、どうしても私は効率優先で考えてしまうところがある。白崎みたいな優しさにはいつも敵わないなって思ってるんだ」
白崎「玉藻ちゃんがずっと支えてくれたからだよ」
なんだか褒め合いがエスカレートしてきた。
この二人、どこまでいくんだろう。

バタンッ
小太刀「おーい図書部、またうるさいぞー」
筧「すまん」
ここで図書委員の水入りか。
小太刀「またあんたらは青春真っ盛り、みたいな盛り上がりしちゃって。聞かされるこっちの恥ずかしさにも気を遣えっつーの」
高峰「話し声がうるさいってなら分かるが、その内容にまでケチをつけられるのはおいちゃん納得いかないよ」
小太刀「黙れ坊主」
高峰「あら厳しすぎますこと……よよよ」
くねくねと床に崩れ落ちる。
小太刀「そんなことよりあんた！」
白崎「え、わ、私ですか？」
わたわたする。
小太刀「さっきから聞いてれば、綺麗事ばかりじゃない。部外者の私でも疑問に思うことがたくさんあったわ」

白崎「い、言ってみてもらえませんか」
静かながら闘志を秘めた目で言う。
小太刀「じゃあ聞くけど、ただの便利なパシリと、図書部ってどう違うの？」
一つ深呼吸を入れて、白崎が答える。
白崎「わたしたちは、学園が今よりもっと楽しくなるような依頼しか受けません」
小太刀「それってつまり、学園が楽しくなるならどんなパシリでもするってことじゃない」
白崎「はい、そうです」
言い切った。
それも力強く。
周りのメンバーも深くうなずいている。
小太刀「ふーん。見上げた奉仕精神ね」
筧「この白崎が部長なんだぜ。その辺りはお察しだろ」
小太刀「じゃあ、多くの人が少し楽しくなる依頼と、少しの人がとても楽しくなる依頼と、一緒に来たらどっちを受けるの？」
白崎「え、えーと……」
桜庭「依頼は、届いた順に受けるかどうかを判断する。それが公平というものだ。まったく同時に来るということはないだろう」
いいタイミングで助け船を出す。
小太刀「それなら、先に小さな依頼が入っているところに、後からものすごく学園を楽しくする依頼が来たらどうすんの？」
桜庭「ぐっ……」
御園「先の依頼を途中で終わらせるのは不義理です。全力で終わらせて、後からきた依頼になるべく早く取り組みます」
今度は、御園が冷静に答えた。
白崎「うん、うん」
我が意を得たりと頷いている白崎。
小太刀「そんじゃ、ほぼ全ての生徒にとっては学園が楽しくなるけど、切り捨てられる人がほんのちょっとだけいるような依頼は？」
鈴木「白崎さんなら、そういう依頼は受けませんよね？」
白崎「そうだね、佳奈ちゃん。さすが弥生シスターズ！」
すかさず答えた鈴木の手を取って、ぶんぶんと振る白崎。
……思えば、俺たちもずいぶん白崎に毒されてきたというか、白崎の考え方に染まってきたものだ。
もともと、今の形の図書部を立ち上げたのは白崎だったし、図書部の活動の仕方も、俺や桜庭が現実との擦り合わせをするにしても、基本的には白崎の理想に従うだけだった。
だが今となっては、白崎自身が上手く言葉にできないような思いも、部員が共有している。
いやいや、恐ろしい伝播力だ。
筧「そんなわけだ、小太刀。俺たちの青春パワーの前にすごすごと引き下がってはくれないか」
小太刀「まったく、あんたらには恐れ入ったわ」
少しわざとらしいくらいに、お手上げのポーズを取る。
小太刀「いつの間にかそんなにまとまっちゃって。でも、うるさいって苦情は来てるんだからね。そこはこれからも容赦しないから」



白崎「ごめんね、小太刀さん」
桜庭「そこは気をつけよう」
二人が素直に頭を下げる。
小太刀「じゃ。ただの便利屋にならないようにせいぜい気をつけることね」
ばたむ、とドアをしめて小太刀が去る。

白崎「ふう……。小太刀さんにはいろいろ迷惑をかけちゃってるね」
桜庭「しかし、図書部の活動内容にまで踏み込んでくるとは、図書委員としては越権行為だろう」
腰に手を当てて、ふんすと鼻を鳴らす。
御園「でも、今日は先輩方の考え方が聞けてよかったです」
鈴木「御園っちも、ちゃんと図書部のことを考えてくれてるのがわかったしね」
御園「そ、そんなんじゃないよ」
後輩たちもすっかり白崎党の一員だ。
桜庭「確かに、小太刀のおかげで私達の思考がはっきりまとまった点は感謝しよう」
筧「それより桜庭、せっかくいろんな考え方が出たんだ、覚えてるうちに文章にしておいた方が良くないか?」
桜庭「む、そうだな」
再び部室内に桜庭の打鍵音が響く。
だが、受けにくい依頼を断るメールを出していたときより、その音は軽やかに聞こえた。

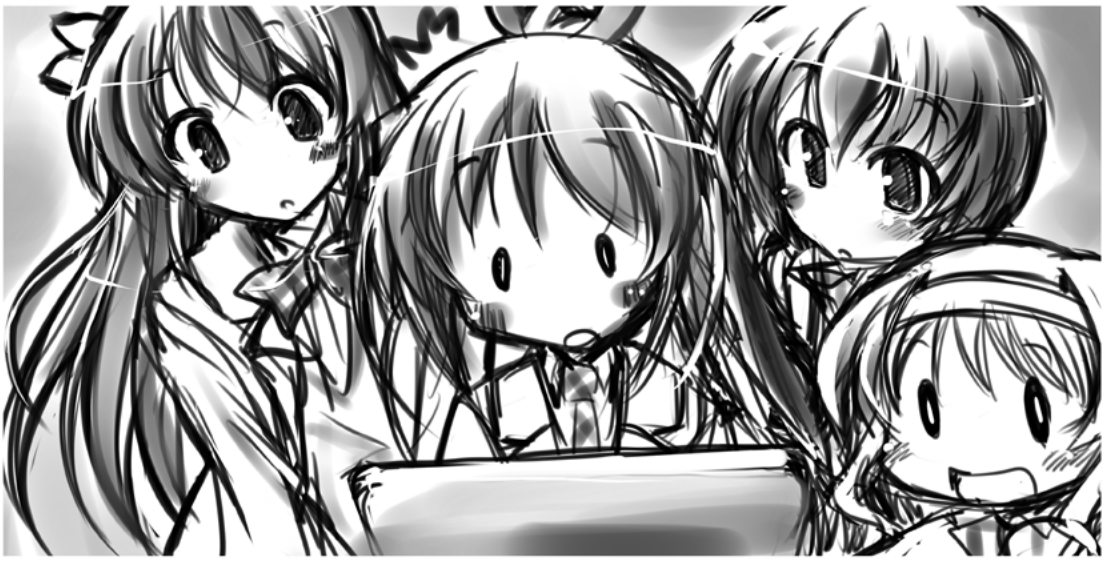
☆

桜庭「じゃあ、これを図書部のページにアップするぞ」

白崎「お願いね」
桜庭「ん?」
カチカチッ
筧「メールか?」
桜庭「ああ。依頼のようだが……」
御園「どんな依頼ですか?」
桜庭「えー、『図書部がビラ配りしていた時の黒髪の綺麗な人に一目惚れしました! 何ていう人だか教えて下さい!』だそうだ」
黒髪と言えば、まあ桜庭のことだろう。
高峰「しっかし、すごいタイミングだな」
鈴木「直前に滑り込んできましたねー」
桜庭「いやー、これはガイドラインでいう個人情報ってのに当たるよな。断らないとな、もちろん」
そう言いながらも、微妙ににやけるのを我慢しているような表情の桜庭。
ま、綺麗な人と言われて嬉しくない女性はいないだろう。

鈴木「あれ、まだ続きがあるみたいですよ?」
筧「ええと……」
御園「『メイド服を着ていた人です!』だそうです」
白崎「それって、玉藻ちゃんじゃなくて……」
高峰「間違いなく、筧京子ちゃんだな」
桜庭「……じゃあ、ガイドラインをアップするからな!」
桜庭の打鍵音は、この日一番大きくなった。

END



大図書館の羊飼い

a good librarian like a good shepherd

「汐美学園を、もっともっと楽しくしませんか?」
何か悪いものでも食べたのか、彼女――白崎つぐみは言った。
前振りがあったわけでもない。それ以前に、彼女と知り合いだったわけでもない。
唐突に、白崎は言ったのだ。
「そういう話なら、生徒会に掛け合った方がいいと思うけど」
と、喉まで出かかった言葉を腹の底まで押し戻したのは、俺――筧京太郎の悪癖だった。

情に棹させば流される、とは有名な小説の一節だが、しばらく後の俺の心境はまさにそれだ。
川の果てまで流れ流され、河口付近を漂っていた俺の周囲には、同じように流された奴らが集っていた。
最高の読書空間だった部室は、もはや昼休みの教室と変わらない有様だ。

「ええと、今日の活動ですが、カフェテリアの……」
聞き慣れた台詞を、白崎つぐみが口にする。

今日もまた、寄り道だらけの活動が始まる――

『大図書館の羊飼い』

対応機種：WindowsXP/Vista/7(32/64bit)

シナリオ：榊原拓・内田ヒロユキ・安西秀明 ほか

原画：べっかんこう

購入制限：18歳未満の方はご購入できません

2013年1月25日発売予定!

榊原拓（以下「榊」）：さあ、久し振りに対談の時間がやって参りました。
べっかんこう（以下「べ」）べ：それじゃ何から話しましょうか。
榊：ついに、体験版が出ましたね！
べ：おお、そうでした。もうみなさんプレイしていただけたでしょうか。
榊：これまでは発売間近に体験版を出していたんですが、今回は結構早めに出ましたよね。7/27にスーパープレリュード発売、そして8/10からの夏コミでの配布ですから、本体発売の5ヶ月以上前ですよ。
べ：ですね。大変な面もありましたけど、僕としては実際にキャラがゲーム内で動いている姿を早めに見れたのは、絵を描く上でもプラスになってるんじゃないかと思います。
榊：あ、それはシナリオもそうです。立ち絵の表情や、キャラのボイスを聞くと、そのキャラクターのイメージがぶわっと膨らみます。
べ：イメージが膨らむといえば、コミカライズもそうですよね。
榊：コミカライズは今回たくさんあります。結構それぞれ方向性というかノリが異なっているので、比較してみたりするのも楽しいかもしれません。
べ：みなさんいい感じに描いてくださるので毎回楽しみです。
榊：僕も毎回楽しみにしてます。あと、ファミ通文庫からノベライズも出して頂きました。ノベライズと言えば、執筆して頂いた田尾さんってうちの登録ユーザーさんだったんですね。後書きで知ったんですが、びっくりしました。
べ：あ、それは僕も驚きました。しかも『バイナリィ・ポット』の頃からってことで、本当にありがたい話ですよね。僕も表紙と挿絵を描かせて頂きましたよ。
榊：まだ発売前なのに、こんなに多くの展開があるなんてありがたい話です。
べ：で、キャラのイメージが膨らんだところで、そちらの制作の進み具合はいかがですか？
榊：シナリオは、収録がある分、CGチームよりも先に締切がやってくると思います。まだ執筆途中のシナリオもありますが、一応予定通り進んでいるつもりです。
べ：マスターも見えてきましたし、こちらもあとは予定通り手を動かすだけです。
榊：シナリオは、今回ちょっとだけ分岐方法にいつもと違うやり方を用意していますよ！　内容は秘密ですがお楽しみに。
べ：僕は雑誌の表紙とか付録とかも結構描いてるので、そちらもチェックしてもらえるとうれしいです。
榊：お互い順調ということで。
べ：ふっふっふ（謎の緊張感）
榊：ふっふっふ（謎の緊張感）
べ：順調じゃないと、演出の北川君にしわ寄せが行っちゃいますからね。
榊：彼にはいつもぎりぎりまで頑張ってもらってます。
べ：まあ、その頃には僕らもデバッグ真っ盛りですけどね。
榊：正月はあるのかな？
べ：正月は誰にでもやってくるよ！
榊：飲みの席で「明日は誰にもあるんじゃい！」みたいな(笑)
べ：会社で新年を迎えるのも趣があるかもしれません。
榊：1/25発売って、『FORTUNE　ARTERIAL』と同じ日なんですよ。当時の日記を見てみると……1/2からはフルで出社してますね。
べ：わぁい正月あったよ！
榊：今回も、ギリギリまでクオリティアップのために頑張りましょう。体調に気をつけつつ。
べ：ですね。発売は2013年1月25日。ぜひご予約を！

2012.9.5　21:50　社内にて

POSTSCRIPT－あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

さて新作『大図書館の羊飼い』の開発ですが、今のところ（産みの苦しみはありながらも）順調に進んでいます。
具体的には、シナリオで言えば全体の構成、CGで言えばキャラクターや舞台のデザインなど、一番スケジュールが読めない部分はほぼ乗り越えたと言える状態になりました。

もちろん、まだまだ先は長いです。
実際のシナリオ・CGなどの制作はむしろこれからが本番。マラソンのように、遠くを見つめながらも一歩一歩進めていきたいと思います。

また、オフィシャルウェブサイトや雑誌等でもご案内しております通り、早くも『大図書館の羊飼い』のコミカライズが始まりました。私たちもコミカライズの作家様に負けないよう本編を作り込んで参りますので、ご期待頂ければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。
今後ともオーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2012年秋　オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
2012年秋号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

http://august-soft.com/
http://aria-soft.com/

大図書館の羊飼い

a good librarian like a good shepherd

オーガストオフィシャルハンドブック
2012年秋号

AUGUST

(C)AUGUST All Rights Reserved.

OHB-120930